

横浜市小児科医会ニュース



No.67 令和5年11月1日

時 言

「会長就任に寄せて」

横浜市小児科医会会長 岩崎 志穂
(いわさきしほ小児科)

令和5年5月に第8代会長の任を賜りました岩崎です。

就任の挨拶として皆様へのお願いを綴らせていただきます。

第7代会長の相原先生から私に次期会長のお話があったのが昨年令和4年の春でした。小児科医会とは関係のない会議に出席した際に「次よろしくね」との簡単な依頼で、一瞬何のことか分からずキョトンとしてしまいました。常任幹事ではあったものの小児科医会の運営に積極的に関与していたとは言い難く、副会長の経験もなかったために本当に青天の霹靂でした。会を運営するための経験も知識もなく全く自信が持てなかったためお断りし続けていましたが、再三の依頼に次の世代へ引き継ぐための中継役を果たさなければならないのだらうと年が明けてしばらくした頃に話をお受けして現在に至ります。

会長に就任して私自身が悩み、他からも散々質問されたのは「小児科医会ってそもそも何?」。医会の存在意義とは何か、との疑問です。横浜市小児科医会は平成元年に設立されました。横浜市各区の小児科懇話会が連合し横浜市小児科連合懇話会として活動していたものが母体となり、横浜市医師会の傘下に入ることを機に横浜小児科医会となりました。その後「医師会、行政当局に働きかけ、協力してゆく団体」としての活動が始まりました。

つまり「狭い地域の小児科開業医がお互いの情報交換をしていた→出てきた問題や変革の希望などを内輪や個人で愚痴っていても世の中に届かない→団体として医師会に意見を出し行政側に届かせる必要があるとの結論に達した」のです。そこで横浜市全体の小児科医の意見をまとめる小児科医会が立ち上がりました。前述の流れから、存在意義としては以下の2点に集約されるのではないかと現在私は考えています。

- ① 会員の身近な問題を集約し横浜市医師会を通じて横浜市行政へ変革を働きかける
- ② 会員の身近な関心事に関する勉強・情報交換

横浜市医師会は開業医全体の総意をまとめ横浜市行政と交渉し政策などに反映していく役目を担っています。開業医全体の総意と一口に言っても各科それぞれの事情、考えがあります。「科としての意見」を医師会に理解してもらい、それを行政への交渉の俎上にあげてもらうのが各科医会の仕事となります。小児科は臨床医全体から見ると数も声も小さな科です。全ての科の事情を汲む訳にはいかない医師会・横浜市行政に如何に上手に効果的に小児科の意見を反映させるかが大切なことになります。医会から上げた意見を医師会に取り上げてもらうには、医会員が開業小児科医の代表に足る会員数を抱えていること、結束して一つのことに取り組む力があることが大事になってきます。

小児科医はこどもの病気だけを診る存在ではありません。健診事業、予防接種、保育園・幼稚園医、学校医などの業務に携わりながらこどもの育成環境を整える役割も担います。行政との連携が必要とされる場面も多々あります。折しも国は平成5年4月からこども基本法を施行し、こども家庭庁を立ち上げました。あらゆる業種の壁を取り払いこどもの育成に必要な物事を進めていくための素地が今後行政から提供されることが期待されます。小児科医の声を政策に反映させる大きなチャンスが巡ってきたのです。

こどもは将来の世界を背負って立つ存在です。会員である小児科医の結束を高め、他科の先生方、医師会、行政の協力を得ながら「こどもまんなか」の活動を推し進めて行きたいと考えております。繰り返しになりますが、医師会・行政に対して意見を通すに資する「小児科医の総意をまとめる」団体とみなされるには多くの開業小児科医の皆様に入会していただき、関心を持っていただく必要があります。一国一城の主人となった開業医が公共活動に労力を割くのはなかなか難しいことです。でも無関心からはこれからの展望は開けません。少しでも意見をあげていただき、知り合いの小児科医で未入会の方を医会へお誘いいただけるでしょうか。できる範囲でのご協力をお願いいたします。



最近の話題

(22)

「異次元」の少子化対策は有効か？

横浜市医師会会長

戸 塚 武 和
(若竹クリニック)

令和5年6月13日、「こども未来戦略会議」は出生率を反転させることができる最後の7年間のチャンスとして、3.5兆円規模の「異次元」の少子化対策を打ち出した。

具体的な財源はまだ決定されていないが、政策の骨子のみは決定された。基本スタンスは、▼多様な価値観・考え方を尊重しつつ、若い世代が希望通りに結婚し子育てできる▼結果として人口減少のトレンドが反転できたら、我が国の社会全体にも寄与。「未来への投資」として子ども・子育て政策を強化するとともに社会全体で支えるという意識の醸成が必要——。その上で次の3つの基本理念を掲げた。

(1) 若い世代の所得を増やす。

若い世代の非正規雇用者の年齢別割合(R3年度厚生労働省)は、男性20～24歳(33.1%)、25～29歳(13.3%)、25～29歳(13.3%)、30～34歳(11.2%)、35～39歳(8.5%)に対して、女性20～24歳(37.9%)、25～29歳(27.7%)、30～34歳(36.7%)、35～39歳(46.6%)と、女性は時間的に自由の動ける非正規雇用者は、育児給付制度等が利用できないことが多く、収入も正規雇用者に比べて少ない。最近では夫婦共働き世帯多く、夫婦共働き世帯の家庭では十分な収入が得られるが、女性は子育てとの両立が困難である。また、パートの時給を上げても、106万円の壁、130万円の壁があ

り、手取りが減少しないよう補助金を支給する案が提案された。夫婦ともに産後育休に参加すれば、手取りの金額は10割保障される新たな策も提案された。

(2) 社会全体の構造。意識を変える。

「男性が育児を手伝う」という感覚ではいけない。子育ては、当然夫婦の共同作業であるという認識が必要である。時短勤務にも育休給付の創設、産後給付の創設、産後機関に男女で育休取得すれば10割給付。さらに非正規・フリーランス、自営業の方々にも経済的支援を創設する。厚労省の調査では、R4年度は男性の育児休業取得率は17.3%で過去最高であったが、R7年度までに50%、R12年度までには85%の目標を掲げている。

(3) すべての子育て世帯を切れ目なく支援する。

「伴走型相談支援」制度で、①妊娠届け出時②妊娠8か月頃③出産後の3回相談が受けられ、さらに10万円相当のギフトがもらえる。親が働いていても、家にいてもすべての子育て家庭を支援する「こども誰でも通園制度(仮)の創設」。あわせて、貧困、障がい・医療ケアが必要な家庭、ひとり親家庭などへの一層の支援、児童手当の拡充と所得制限撤廃、高等教育費の負担軽減、子育て世帯への住居支援などが盛り込まれた。

以上、「異次元」であるか否かは色々な意見や批判も聞かれる。しかも持続可能な財源がしっかりと確保されたわけでもないようだ。

また少子化の一番の原因は、晩婚化・晩産化、あるいは非婚化である。若者の多くが非正規雇用等による低所得のため、将来や子育てへの経済的な不安から、晩婚化、非婚化が増加している。

今回の制度は、すべて結婚した後の対策であり、結婚を望んでも結婚に至らない若者も多い。自治体もマッチングアプリやお見合いイベントなどの婚活を支援している。

国家の繁栄を強調するつもりはないが、どうか日本の将来が若者にとって希望の持てるものになってほしいと考えるのは私だけだろうか。



研修会抄録

横浜市小児科医会研修会

日 時 令和5年5月11日（木）

会 場 TKPガーデンシティ

PREMIUMみなとみらい・ZOOM

< 講演 1 >

「小児アトピー性皮膚炎治療のこれまでとこれから」

講 師 神奈川県立こども医療センター皮膚科 馬 場 直 子 先生

当科は紹介予約制の子ども専門病院であるが、治療に難渋していてコントロールできないと紹介されてくるアトピー性皮膚炎（AD）の小児が後を絶たない。AD治療では、皮膚の炎症を早く抑えてバリア機能異常を是正することが、アレルゲンの侵入による経皮感作を防ぐ意味でも重要であり、病態に基づいたスキンケアと外用療法を完璧に行うことができれば、炎症や痒みをコントロールでき、それほど悩む必要のない疾患になってきている。それにもかかわらず日常の診療現場では、患者さんに研究成果が十分に生かされていない現状もある。特に小児では、保護者の方が様々な情報に惑わされ薬に対する過剰な心配のあまり、外用療法・内服療法が不十分であるため、良いコントロールが得られていないことがまだまだ多い。

演者は1994年に初代皮膚科部長の齋藤先生から一人医長として引き継いだ。齋藤先生は開院以来24年間小児アトピー性皮膚炎治療に熱意を持って全身全霊を傾けて来られた。その一端を現わしている先生が患者向けに作られた指導冊子があるのでご紹介したい。その中には今でも十分通用する患者指導のポイントや病診連携の重要さが示されている。私は

引き継いだ後、この齋藤先生の精神を遵守しつつ新しい病態の理解や新薬を導入してきた。

病態解明に大きく貢献したのはフィラグリン遺伝子変異や表皮のタイトジャンクションの発見、それに伴い食物アレルギーの経皮感作という概念であった。さらにその後Th2細胞から産生されるIL4、IL13、IL31などの病態への関与なども判明し、結局ADというものは皮膚バリア機能異常、アレルギー炎症、痒みの3者が互いに影響を及ぼしあって悪循環に陥って重症な皮膚炎を形成していることが明確になってきた。

このように病態が詳しくわかってくると、そのどこかの病態に着目して悪循環を止めようという新しい薬が次々と上梓されるに至った。アレルギー炎症における主要なサイトカインであるIL4とIL13受容体を阻害するデュピルマブ、種々のサイトカインが細胞に結合した後の細胞内でシグナル伝達を阻害するJAK阻害薬、痒みの主要なサイトカインであるIL31の受容体を阻害するネモリズマブなど、新薬が次々と登場し治療選択肢が大きく広がった。しかし小児では注射薬や内服薬などの全身療法には年齢の適応制限があり、今

のところ小学生以下では適応外であり、従来通り外用療法が治療の主軸となることに変わりはない。幼い時期からのスキンケアと外用療法の徹底により、QOLを良好に保ち、痒みのために睡眠が妨げられ成長や発達に悪影響を及ぼすことのないようにすることが治療の目標であることを保護者と共有することが

何より重要と考える。

今後の課題として、広がる治療選択肢をいかに使い分けるか、外用薬を塗るのが苦手な発達障害の患児にどうやって塗るのか、そして病診連携をもっと効率よく機能させるにはどうしたらよいかなどが挙げられると思う。

< 講演 2 >

小児心身症への対応 ―小児科かかりつけ医にできること―

講 師 福岡大学小児科 永 光 信一郎 先生

日本小児科医会はCommunity Pediatricsの確立を目標に、かかりつけ医として地域で暮らす子どもたちの医療、保健、福祉の充実を展開している。成育基本法に記されている理念を遂行するためにかかりつけ医の役割はさらに重要となっている。

現在の医療提供体制の中で、小児科医に求められている喫緊の課題として、かかりつけ医による子どもの心の問題や発達障害への診療がある。そして、病気の子どもたちを診ることに加え、健康な子どもたちのヘルスプロモーションを担うことも期待されている。

各地域で神経発達症の子どもの専門医療機関での診察待ちが数か月から数年となっている。子どもたちがどのような診断を専門医療機関で受けたとしても、その子どもたちは地域で暮らすことになる。もし、専門医療機関受診待ちの前にかかりつけ医で家族や本人の困りごとを聴取することができたならば、その情報は専門医療機関での診療に役立つ。さらに子どもの症状が落ち着いた後に専門医療機関から逆紹介を受けることが可能になるかもしれない。専門医療機関受診前に特定疾患カウンセリング料（初回500点、2回目400点、

月に2回まで）を活用して、6回程度（月に1～2回）、かかりつけ医への受診を促してみる実践をcommunity pediatricsの展開として期待されている。1回の受診は10分程度と位置づけ、困りごとの確認（1回目）、発達歴の聴取（2回目）、保護者の解釈モデルの確認（3回目）、学校・園側の認識の確認（4回目）、発達障害・心身症の一般論の説明（5回目）、その他睡眠に関することなど（6回目）を聞いていく。実践を体験することが今、かかりつけ医に期待されている。

多くの小児科医は心身症の対応に苦慮する。子どもが示す多彩な症状に困惑し、終わりのない繰り返す症状にフラストレーションを感じ、一見病気に見えない子どもの診療に時間を費やすことに辟易する陰性感情を抱くときがある。それは小児科医が子どもを治してあげたいという気持ちが強いからかもしれない。時間がかかることを理解しないといけない。時には、結果がでないことで家族も子どもも医師の前から去っていくこともある。それに耐え、9のうまくいかなない事例を繰り返しても、1の成功体験は、私たちをまた心のことで悩む子どもたちの前へと奮い立たせ

てくれる。

成人期の心身健康や疾病予防のために必要なことは、子どもの時から健康課題への関心をもつことである。community pediatricsとして、病気の子どもの診ることと同時に健康な子どもを診て、保健課題への助言を行っていくことがかかりつけ医に期待されている。食習慣の指導、睡眠衛生の助言、メディア利用方法、適度な運動習慣、家族関係への助言、

いじめ発見時の対応、気分が沈んだ時の対応、性行動に対する正しい知識の提供など、かかりつけ医の役割はさらに重要となる。身体機能のリスク因子を抽出する学校健診に加え、心理社会面へのアプローチを実施するかかりつけ医での思春期健診の社会実装化が必要である。一方でICTを活用したアプリケーションによる健康増進も今後普及してくると思われる。



第50回 横浜市産婦人科医会・小児科医会研究会

日 時 令和5年6月2日（金）

会 場 横浜市医師会会議室・Zoom

< 講演 1 >

小児歯科臨床の現状と最新トピックス

講 師 神奈川歯科大学小児歯科学講座 教授 木 本 茂 成 先生

平成30年4月に公的医療保険の対象として、新たに小児期の「口腔機能発達不全症」という病名が厚生労働省に認可されました。それに伴い口腔機能の発達の遅れが認められる小児を対象として、歯科において口腔機能の発達に関する指導・管理を公的医療保険の対象として提供できることになりました。一方、同時に老年歯科医学会から提案された、成人における「口腔機能低下症」という病名についても公的医療保険の対象となっています。歯科医療において、齲蝕や外傷など歯の実質欠損、炎症性病変などの器質的な異常に対する検査や処置以外の「口腔機能」を対象とした指導や管理が公的医療保険の対象となったことは、歯科界において画期的な出来事でした。

このように歯科医療において口腔機能の管理が重要視されてきた背景には、高齢期におけるオーラルフレイルの予防を重視する立場に立った視点があります。日本歯科医学会では、平成30年3月に歯科医療関係者が小児期の口腔機能発達に関する評価と適切な対応を可能とすることを目的として、小児の「口腔機能発達評価マニュアル」を作成し、同学会ホームページ上で公開しています。このマニュアルは口腔機能の発達を評価する上での診断基準の目安を提示しており、さらに対応する検査方法や基本的な対応を示していま

す。これにより、小児歯科を専門とする歯科医師以外でも、口腔機能の発達に関する評価を可能となっています。

近年の調査結果から、口腔機能の評価項目である口唇閉鎖力や舌挙上力（舌圧）は、幼児期において、ほぼ成人の6～7割程度を獲得することが判ってきました。また、口唇閉鎖不全が認められる小児（3～12歳）は3割を超えており、習慣的な口呼吸は小児の顔貌の形態にも影響を与えることが報告されています。さらに舌小帯短縮症により舌尖部の運動障害を示す小児では、構音機能や摂食機能に影響を及ぼすことと口腔機能発達不全症との相関についても報告されています。

現在、小児期の齲蝕罹患は減少しつつあり、小児歯科医療は口腔機能の発達支援という新たな役割を担う時代となっています。この口腔機能の獲得、維持、向上に向けた支援は、時を同じくして保険診療の対象となった成人の「口腔機能低下症」への対応とともに、歯科における乳幼児期から高齢期へとつながるライフコースアプローチとなります。

歯科における口腔機能発達不全症への適切な対応は、我が国の将来を担う子どもたちの健康を口腔機能の発達から支えることにつながります。歯科からのライフコースアプローチを実現するためには、多職種が連携し、健全な口腔機能の育成を目指すための協力が不

可欠です。そして子どもの発達支援には、小児科や小児歯科関連の医療関係者のみならず、保護者、保育関係者、教育関係者、行政担当者等の早期の「気づき」が最も重要であると考えています。



病院紹介

横浜市立大学附属病院

〒236-0004 神奈川県横浜市金沢区福浦 3 - 9

Tel 045-787-2800 (代表)

Fax 045-787-2866

<https://www.yokohama-cu.ac.jp/fukuhp/>

許可病床数：674床（令和4年6月1日現在）

一般病床 632床，精神病床 26床，結核病床 16床

※一般病床には，ICU 8床，HCU 8床，CCU 4床，ACU 4床，NICU 9床，臨床試験専用病床 20床含む。

診療科目：（令和4年6月1日現在）

血液・リウマチ・感染症内科，呼吸器内科，循環器内科，腎臓・高血圧内科，消化器内科，内分泌・糖尿病内科，臨床腫瘍科，小児科，精神科，皮膚科，放射線科，呼吸器外科，消化器・一般外科，乳腺・甲状腺外科，乳腺外科，心臓血管外科・小児循環器，消化器外科，整形外科，形成外科，脳神経外科，眼科，耳鼻いんこう科，歯科・口腔外科・矯正歯科，産婦人科，泌尿器科，麻酔科，リハビリテーション科，児童精神科，脳神経内科，脳卒中科，病理診断科，遺伝子診療科，総合診療科，がんゲノム診断科，救急科，難病ゲノム診断科，緩和医療科

医療職職員（令和4年5月1日現在）

医 師 医学部教員135名 病院教員158名 診療医180名 非常勤139名 初期研修医77名
歯科医師 医学部教員 6名 病院教員 3名 診療医 5名 非常勤 3名
看護師 808名
薬剤師 46名

実績：（令和3年度）

外来患者数 439,870人，1日平均 1,817.6人

入院患者数 186,623人，1日平均 511.3人

平均在院日数 11.7日

平均病床利用率 78.2%

手術件数 6,576件

分娩数 484件

救急患者数 7,071人（救急搬送数：3,319人 ウォークイン患者数：3,752人）

地域医療支援病院紹介率 80.6%

地域医療支援病院逆紹介率 82.0%

【理念】

当病院は、「市民が心から頼れる病院」として、高度でかつ安全な医療を市民に提供するとともに、質の高い医療人を育成します。

【基本方針】

- 1 生命の尊厳を深く認識した医療の実践
- 2 安全で質の高い医療の提供
- 3 患者本位の医療サービスの向上と地域医療への貢献
- 4 高度・先進医療の推進
- 5 質の高い医療人の育成
- 6 健全な病院経営の確立

【病院概要および特色】

当病院は、病院理念にありますように『市民が心から頼れる病院』として、また、『高度でかつ安全な医療』を皆様に提供させていただくとともに『質の高い医療人を養成』することを使命として皆様の診療にあたらせていただいております。

また、当病院は特定機能病院として、高度先進医療の開発と発展を実施する医療人の育成機関でもあり、さらに厚生労働省認定「地域がん診療連携拠点病院」、WHO（世界保健機関）認定「赤ちゃんにやさしい病院＝Baby Friendly Hospital」、日本医療機能評価認定病院等をはじめとした各診療領域での高度先進かつ総合的診療機能をもった病院として診療を実施しています。最も重要な医療の安全性におきましても、その推進に日々努力を重ねています。

医育機関としては、神奈川県にある唯一の公的医育機関附属病院として、将来の優秀な医療の担い手を育てるべく、最高の医学教育を目指しております。そのため、各専門診療領域のエキスパートをそろえ、質および安全性において最高の医療を行うべく努力しています。学内には多くの医学生、看護学生、その他の医療関係の学生が実習をしており、患者さんのご協力の下、教育が順調に進んでいることを感謝しております。

言うまでもないことではありますが、医療は、私ども医療スタッフだけが行っているものではありません。言い換えると、患者さんのご協力なくしては、医療は進みません。これからも、患者さんと医療チームがともに理解しあい、ともに進み、ともに高めあう医療を目指したいと思います。

【小児科の概要および特色】

横浜市立大学附属病院小児科では、小児リウマチ／免疫不全／特殊感染症（結核診療含む）、小児がん／血液疾患、小児循環器疾患、新生児／未熟児の集学的治療の4分野の診療を行っています。腎／泌尿器疾患、神経疾患、内分泌疾患／糖尿病、新生児／未熟児の集学的治療の4分野の診療を行っている横浜市立大学附属市民総合医療センター小児科と機能分担し円滑な連携診療を構築しています。

小児科スタッフは常勤医20名，専攻医4名，初期研修医2～5名で構成されています。病棟は小児病棟34床，NICU病棟は9床を有しており，小児病棟には長期入院患者のための院内学級が併設されています。また，県内唯一のチャイルド・ライフ・スペシャリスト（Child Life Specialist：CLS）が配属されている大学病院であり医療環境にある子どもや家族に心理社会的支援を提供することができています。

以下に4分野の紹介を記載させていただきます。

小児リウマチ／免疫不全／特殊感染症

当院は国内有数の小児リウマチ診療拠点として，若年性特発性関節炎160例，全身性エリテマトーデス60例，若年性皮膚筋炎40例をはじめ，計500名の患者様をフォローしています。地域基幹病院と連携し，免疫グロブリン療法不応川崎病に対する治療も行っています。また，結核接触者検診・コッホ現象の診療に加えて，当院は小児結核病棟を有する県内唯一の医療機関であるため，肺結核や粟粒結核の入院を受け入れています。

小児がん／血液疾患

横浜市の小児がん拠点病院として，日本小児がん研究グループ（JCCG）の参加施設として，脳神経外科，整形外科，放射線科等と協力しながら年間約30例の新規小児固形腫瘍・脳腫瘍・白血病患者の診療を行っています。また，再生不良性貧血，溶血性貧血，血小板減少症，血友病等の血液疾患全般の診療も行っています。

小児循環器疾患

小児循環器疾患全般に関する診療が可能です。小児循環器専門医が4名在籍しており，心房中隔欠損症に対するカテーテル治療（成人患者様も含む），頻拍性不整脈に対するカテーテル治療などの各種治療を行っています。心臓血管外科と合同チームを編成し，先天性心疾患に対する各種治療（新生児開心術を含む）を行っています。

未熟児・新生児

年間約50例の超低出生体重児，極低出生体重児，先天性心疾患児など，集中治療を要する新生児の専門的治療を行い，引き続き外来ではそのフォローアップを行っています。

今後も神奈川県の小児医療の中心施設の一つとして地域医療への貢献に努めていきたいと思えます。それと同時に，教育・研究機関としても中心的役割を果たすことが我々の使命であると考えております。今後とも先生方の御支援の程，どうぞ宜しくお願い致します。

（文責：横浜市立大学附属病院 小児科 渡 辺 重 朗）

横浜市小児科医会会長

岩 崎 志 穂

5月から会長になりました岩崎です。

今まで相原先生が推し進めてこられた事を引き継ぎつつ、医会内部のまとまりも醸し出すことを目標にしていく所存です。

私の就任前後から小児では様々な種類の感染症が勃発し、5～7月はいつになく多忙であった先生も多かったのではないのでしょうか。多くの発熱の中にコロナや季節外れのインフルエンザも入り込み翻弄されました。この原稿を書いている8月末はようやく落ち着きを取り戻して「いつもの8月末」の感じになりました。今後どうなるかは分かりませんが、異常気象も相まって今までの感染流行の季節性がなくなるのは厄介だなと感じています。

そんな中でも肅々と医会の会議、勉強会などは開催されていました。以下、開催報告と現在進行中の事案、これからの予定をしたためます。

1. 会議報告

5月11日に令和5年度総会、7月5日に横浜市小児科医会第2回常任幹事会が開催されました。総会では令和4年度の事業・決算報告、令和5年度の事業計画・予算・会則の一部改訂が報告されいずれも承認されました。また、令和5・6年の役員人事が発表され、若い先生数人に役員に入っていただいています。今後ベテランの先生方の力をお借りして少しずつ次世代にバトンタッチして行ければと思います。役員名簿は他ページに掲載してあります。ご参照ください。第2回常任幹事

会では医会内の役割分担、今後の勉強会などの確認、医会ニュースの執筆者や「みんなの健康ラジオ」の担当などを決定しました。現在、幹事が中心となって勉強会の座長やラジオ出演をしていましたが、今後会員の皆様にも参加していただければと考えています。

2. 勉強会

以下が開催されました。

5月11日総会と同時開催の研修講演会「小児アトピー性皮膚炎治療 これまでとこれから」「小児心身症への対応 -小児かかりつけ医に出来ること-」、6月2日第50回横浜市産婦人科医会・小児科医会研究会（当番：産婦人科医会）「小児歯科臨床の現状と最新トピックス」、横浜市小児科医会研修会「診療所版J-SIPHEについて～抗菌薬サーベイランスへの活用～」「小児てんかんとドラベ症候群診療」

多方面のテーマでそれぞれ興味深いものでした。いずれの勉強会も現地開催+webのハイブリッド方式、70～80人参加で人数的には盛況でしたが、現地参加者は比較的少なく会場は静かでした。コロナをきっかけに始まった現地とwebのハイブリッド方式はこれからも続くのではないかと思います。Webは移動時間の無駄がなく非常に便利なのですが、現地参加でお会いした先生と雑談や些細な相談を交わすことが少なくなったのは寂しい気がします。

3. これからの予定

1) 第2回秋季合同研修会（都筑区小児科医会と合同）

日 時：令和5年9月6日（水）

会 場：都筑区医師会会議室+オンライン
配信

共 催：都筑区小児科医会・昭和大学横浜市北部病院西棟講堂

1. 症例提示 横浜市北部病院

2. 講演

演 者：横浜労災病院 小児科部長

菊池 信行 先生

演題名：「開業医目線での低身長診断」

日 時：令和5年11月22日（水）

会 場：横浜市医師会会議室＋オンライン配信

演 者：横浜市大耳鼻咽喉科教授

折館 伸彦 先生

演題名：「男性のHPVワクチン接種 そのメリットは？」

2) みんなの健康ラジオ

出演者：ごとう小児科アレルギー科

後藤 正之 先生

3) 第31回横浜臨床医学会学術集談会

日 時：令和5年12月2日（土）16：00～

※小児科医会の発表は2番目（16：20～）の予定

会 場：崎陽軒本店

演 者：福澤クリニック 小児科

西巻 滋 先生

演題名：胎児・乳幼児の医療現場から成人の医療現場に伝えたいこと

4. 予防接種研修義務化

相原前会長就任時から進めてこられた予防接種研修義務化が内科、外科、産婦人科、耳鼻科医会の賛同を得られた結果、今年度、医師会の準備会議が立ち上がりました。小児科医会からは松岡常任幹事が代表として参加しています。小児関係のワクチンは平成25年にHib、小児肺炎球菌、HPV、平成26年に水痘、平成28年にHBV、令和2年にロタウィルスのワクチンが定期化され、ここ10年の変化は激しいものがあります。今後も5種混合ワク

チンの登場などで定期接種が変わる可能性があります。「義務化」は皆様にも負担がかかるかもしれませんが、情報の取りこぼし、接種に係る事故を防ぐためにも重要と思われます。何かご意見があれば挙げてください。

5. KCMCとの感染対策地域連携

8月4日、こども医療センター講堂＋Zoomミーティングで2023年度第1回KCMCとの感染対策地域連携合同カンファレンスが開かれました。参加施設は神奈川県立こども医療センター、康心会汐見台病院、南福祉保健センター、横浜市小児科医会でした。①横浜市感染症発生動向、②各診療所における抗菌薬の使用状況が提示され、意見交換が行われました。感染症の動向、抗菌薬の使用状況とも本当に興味深く、会員の皆様にも聞いていただきました。医会では今年常任幹事になっていただいた宮地悠輔先生が中心となっています。今後、参加施設を増やして、抗菌薬の使用状況の精度を上げることが課題だと思われます。ご協力をお願いいたします。

6. その他

現在、保育園医の手引きの改定、病児保育所でのコロナ検査・コロナ罹患児の預かりの検討など小児科医会員の皆様の意見を反映して横浜市と進めている話し合いもあります。日常診療などで疑問を感じる制度や区役所などの対応などありましたら、お知らせください。また、勉強会のテーマなどもご希望があれば事務局までご意見をお届けください。

今後とも横浜市小児科医会の運営にご協力いただけると幸いです。

区会だより

東部小児科医会

令和5年度前半の主な活動を報告します。

(1) 令和5年4月20日

第126回横浜市東部小児科医会

会場：Zoomオンライン開催

講演1 小児科クリニックからみたアトピー性皮膚炎と食物アレルギー

演者 くまのこキッズアレルギークリニック 院長 岡本 義久 先生

講演2 皮膚科でのプロアクティブ療法の実践

演者 済生会横浜市東部病院 皮膚科部長代理 渡辺 絵美子 先生

(2) 令和5年7月26日

第127回横浜市東部小児科医会

第17回横浜市東部小児連携の会

会場：済生会横浜市東部病院・Zoomオンライン併用

症例報告 座長 済生会横浜市東部病院 総合小児科 岩本 眞理 先生

1. サルモネラ菌による骨髄炎
総合小児科 東（あづま）靖子
2. 大麻入りグミを食し中毒症状を呈した2歳児 総合小児科 市川 竜太
3. 治療反応性に乏しい慢性咳嗽を主訴とした食道アカラシア
小児肝臓消化器科 青木 真史
4. 嘔吐を主訴に来院し外来で心停止したCOVID-19感染
総合小児科 龍崎 理誠

(予定) 令和5年9月21日

第128回横浜市東部小児科医会

会場：新横浜グレイスホテル

講演 アレルゲン特異的免疫療法の最近の話題：舌下免疫療法を中心に

演者 千葉大学 予防医学センター 特任教授 下条 直樹 先生

感染法上の分類が5類に変わったとはいえ、COVID-19の流行が続くため、横浜市東部小児科医会の症例検討会・講演会は、オンラインをメインとする開催となっておりますが、今年9月の講演会はホテルを会場とする講演会を開催予定です。久しぶりに会員同士、直接、顔を合わせられる機会になるので楽しみにしております。

(文責 川端 清)

南西部小児科医会

当医会では年数回、講演会を用意しております。今年度上半期はアトピー性皮膚炎について2回開催しました。

1回目 令和5年4月4日

「これからの小児アトピー性皮膚炎治療～いかに重症化させないか」

神奈川県立こども医療センター皮膚科部長 馬場 直子 先生

2回目 令和5年6月29日

「クリニックのスキンケア指導で大切にしていること」

医療法人わかば会 わかばこどもクリニック 看護師 内山 あやな 様

「アレルギーのトータルケアと小児アトピー性皮膚炎治療」

横浜医療センター小児科部長

只木 弘美 先生

特に2回目の講演会は3年ぶりに横浜医療センター大会議室をお借りして、横浜医療センターの先生方と対面できたこと、有意義であったと思います。母子医療センター部長鉾竜範先生からもご挨拶いただき、下半期にはこれまで開催できなかった小児疾患研究会（症例検討会）を再開する予定です。ご期待ください。また、講演会は10月にワクチン関連の話題を取り上げます。

（文責 小泉 友喜彦）

—— 庶 務 報 告 ——

1. 令和5年度総会及び研修会

R5. 5. 11（木）web併用

会場：TKPガーデンシティPREMIUMみなとみらい

出席者：会員82名（来場27名，web55名）

(1) 総 会

1. 会長挨拶
2. 議長選出
3. 議事
 - 1) 令和4年度事業報告
 - 2) 令和4年度決算報告
 - 3) 令和5年度事業計画（案）
 - 4) 令和5年度予算（案）
 - 5) 会則の一部改正について
 - 6) 令和5・6年度医会会長及び常任幹事
 - 7) その他

(2) 研 修 会

講演1 演題『小児アトピー性皮膚炎治療
これまでとこれから』

講師 馬場 直子 先生（神奈川県立こども医療センター皮膚科部長）

講演2 演題『小児心身症への対応 ―小児科かかりつけ医にできること―』

講師 永光 信一郎 先生（福岡大学病院小児科 主任教授）

2. 常任幹事会

第1回 R5. 4. 26（水）

於 横浜ベイシェラトンホテル&タワーズ

出席者：17名

第2回 R5. 7. 5（水）

於 横浜ベイシェラトンホテル&タワーズ

出席者：15名



3. 第49回産婦人科・小児科研究会

R4. 6. 3 (金) web併用

会場：横浜市医師会会議室

出席者：67名（小児科32名，産婦人科33名，
他2名）

講演 演題 『小児歯科臨床の現状と最新ト
ピックス』

講師 木本 茂成 先生（神奈川歯科大学
小児歯科学講座 教授）

4. 広報活動

R5. 5. 1 (月)

小児科医会ニュース（第66号）の発行

（文責 阿座上 志郎）

5. その他

* 横浜市小児科医会研修会

R5. 7. 13 (木) web併用

会場：崎陽軒本店・Zoom

出席者：66名（来場12名，web54名）

講師① 大野 茜子 先生（国立国際医療
研究センター病院AMR臨床リファ
レンスセンター）

講師② 今井 克美 先生（NHO静岡てん
かん・神経医療 センター 院長）

* 2023年度第1回KCMCとの感染対策地域連携 合同カンファレンス

R4. 8. 4 (金) web併用

会場：神奈川県立こども医療センター講堂

出席者：33名（来場5名，web28名）

参加施設：横浜市小児科医会

康心会汐見台病院

南福祉保健センター

神奈川県立こども医療センター

内容 ・小児科定点感染症報告まとめ

・各診療所における抗菌薬の使用状況

・新興感染症等の発生を想定した訓練

* 第2回横浜市小児科医会・都筑区小児科医会 合同研修会

R5. 9. 6 (水) web併用

会場：都筑区医師会館2階会議室・Zoom

出席者：64名（来場10名，web54名）

講師① 渡辺 佳孝 先生（昭和大学横浜
市北部病院）

講師② 島 はるか 先生（昭和大学横浜
市北部病院）

講師③ 菊池 信行 先生（横浜労災病院
小児科部長）

==== 会計報告 ====

横浜市小児科医会会計の中間報告を申し上げます。

中間報告 R05. 09. 30現在

現在高	3,636,258円
(内訳) 現金	0円
郵便貯金	434,700円
医師信用組合	3,201,558円

（会計 佐藤 和人）

令和5・6年度 横浜市小児科医会役員名簿

<任期：令和5年4月～令和7年3月>

令和5年4月1日現在

	役職	氏名	〒	連絡先並びに医療機関名	TEL	FAX
新	名誉会長	相原 雄 幸	232-0022	南区高根町3-17 ストーク大通り公園参番館201号 相原アレルギー科・小児科クリニック	261-0737	261-0737
新	会 長	岩 崎 志 穂	221-0802	神奈川区六角橋1-6-14 白楽メディカルセンター3F302号室 いわさきしほ小児科	947-4522	947-4521
	副 会 長	中 野 康 伸	222-0012	港北区富士塚1-1-1 (医) 中野こどもクリニック	434-6500	434-8807
	〃	阿座上 志 郎	225-0001	青葉区美しが丘西3-65-6 あざがみクリニック	909-0092	909-0093
新	〃	磯 崎 淳	231-8682	中区新山下3-12-1 横浜市立みなと赤十字病院	628-6100	628-6101
新	〃	川 端 清	230-0052	鶴見区生麦5-21-16 川端こどもクリニック	505-6670	505-6675
	常 任 幹 事	中 島 章 子	232-0067	南区弘明寺町144-1 水谷ビル2F ゆいこどもクリニック	730-4152	730-4146
	〃	石 井 正 浩	230-0051	鶴見区鶴見中央1-19-4 メディカルプラザD鶴見3F 石井小児科・心臓小児科	500-1020	500-1021
	〃	乾 あやの	230-0012	鶴見区下末吉3-6-1 (社福) 恩賜財団済生会横浜市東部病院小児肝臓消化器科	576-3000	576-3586
	〃	岸 健太郎	227-0046	青葉区たちばな台2-7-1 (医) 一成会たちばな台クリニック	961-7835	961-7862
	〃	松 岡 誠 治	227-0054	青葉区しらとり台20-13 松岡医院	981-6093	981-6066
新	〃	津 村 由 紀	220-8521	西区みなとみらい3-7-3 (一財) 神奈川県警友会けいゆう病院	221-8181	681-9665
新	〃	藤 原 祐	236-0052	金沢区富岡西1-48-12 (医) ふじわら小児科	773-6333	773-6332
新	〃	後 藤 正 之	227-0062	青葉区青葉台1-6-13 ケントロンビル2F ごとう小児科アレルギー科	983-5110	983-5150
新	〃	宮 地 悠 輔	232-0066	南区六ツ川3-86-5 みやじ小児科クリニック	716-1011	744-1805
新	〃	岩 田 真 美	231-0005	中区本町6-50-10 横浜市こども青少年局	671-4287	550-3946
	緑 区 医 会 長	山 田 俊 彦	226-0011	緑区中山5-29-18 森の子キッズクリニック	929-5501	929-5502
	南 部 医 会 長	佐 藤 和 人	233-0002	港南区上大岡西1-15-1 カミオ404-2 上大岡こどもクリニック	882-0810	846-8742
新	中 区 医 会 長	草鹿砥 宗 隆	231-0868	中区石川町1-11-23 (医) KMG小菅医院	651-6177	651-6371
	東 部 医 会 長	川 端 清	230-0052	鶴見区生麦5-21-16 川端こどもクリニック	505-6670	505-6675
	南 西 部 医 会 長	小 泉 友喜彦	245-0061	戸塚区汲沢8-5-5 (医) 友泉会小泉小児クリニック	871-5566	871-1003
	西 部 医 会 長	尾 崎 亮	240-0044	保土ヶ谷区仏向町121-2 (医) 亮優会おざき小児科	348-4141	348-4144
	青 葉 区 医 会 長	有 本 寛	225-0002	青葉区美しが丘2-20-18 ドムス有本101 有本小児科内科	901-6870	901-7100
	都 筑 区 医 会 長	百 々 秀 心	224-0007	都筑区荏田南3-1-7 こどもの木クリニック	947-1888	947-1889
	旭 区 医 会 長	鈴 木 剛	241-0821	旭区二俣川2-50-14 コブレ二俣川7F (医) 優志会二俣川こどもクリニック	366-0505	366-0508

役職	氏名	〒	連絡先並びに医療機関名	TEL	FAX
幹 事	大 川 尚 美	223-0052	港北区綱島東2-12-19 福島ビル1階 大川小児クリニック	546-1071	546-1071
〃	今 井 満	246-0014	瀬谷区中央1-10 カサデ・パティオ2F 瀬谷こどもクリニック	304-0045	304-9904
〃	伊 藤 秀 一	236-0004	金沢区福浦3-9 公立大学法人横浜市立大学附属病院	787-2669	787-2931
〃	志 賀 健太郎	232-0024	南区浦舟町4-57 公立大学法人横浜市立大学附属市民総合医療センター	261-5656	231-1846
〃	石 原 淳	221-0855	神奈川区三ツ沢西町1-1 横浜市立市民病院	316-4580	316-6580
〃	宇南山 貴 男	232-0071	南区永田北3-36-5 宇南山小児科医院	714-1036	714-1046
〃	小 林 拓 也	236-0053	金沢区能見台通4-8 (医) 拓能見台こどもクリニック	786-2055	786-1006
〃	城 裕 之	222-0036	港北区小机町3211 (独法) 労働者健康安全機構横浜労災病院	474-8111	474-8323
〃	田 中 文 子	234-8503	港南区港南台3-2-10 (社福) 恩賜財団済生会横浜市南部病院	832-1111	831-0833
〃	池 田 裕 一	227-8501	青葉区藤が丘1-30 昭和大学藤が丘病院	971-1151	330-4021
〃	時 枝 啓 介	224-0021	都筑区北山田1-12-15 (医) 慶誠会ときえだ小児科クリニック	595-4150	595-4151
〃	鹿 間 芳 明	232-8555	横浜市南区六ッ川2-138-4 神奈川県立こども医療センター	711-2351	721-3324
新	〃	226-0022	緑区青砥町220-1 みどりの家診療所	937-6102	482-7451
新	〃	220-0053	西区藤棚町1-58-6 富田クリニック3F (医) 藤仁会富田こどもクリニック	242-1543	242-0301
新	〃	221-0855	神奈川区三ツ沢西町1-1 横浜市立市民病院	316-4580	316-6580
新 監 事	古 谷 正 伸	230-0041	鶴見区潮田町2-113-1 古谷小児科	501-9160	501-6501
新	〃	246-0022	瀬谷区三ツ境21-10 サニーハイツ三ツ境1階 (医) 亀甲会池部小児科・アレルギー科	360-6080	360-6077
顧 問	水 野 恭 一	224-0026	都筑区南山田町4258 水野クリニック	593-4040	592-3371 593-4068
〃	寺 道 由 晃	231-0806	中区本牧町1-178	623-3693	623-3693
〃	矢 崎 茂 義	235-0016	磯子区磯子2-13-13 (医) 矢崎小児科	751-4378	753-8768
〃	藤 原 芳 人	236-0052	金沢区富岡西1-48-12 (医) ふじわら小児科	773-6333	773-6332

コロナ・HPV ワクチンに関するアンケート結果

・当医会会員 224 名に対してコロナ・HPV ワクチンのアンケートを行いました。
90 名からご回答を頂き、回収率は 40.2%でした。

結果

1. 診療所・クリニックが 88%を占め(1. 施設)、50・60・70 歳代が 81%でした(2. 年齢)。

コロナワクチン

2. コロナワクチンを接種している施設は 82%でした(3-1. コロナワクチンの接種)。
3. コロナワクチンに対する基本的な考え方を接種年齢別に伺ったところ、すべてに推奨すると回答した方は成人で多く、接種対象年齢が低いほど少ない傾向でした。一方推奨しないという回答は成人で少なく、接種対象年齢が低いほど多い傾向でした(3-2-1. コロナワクチンに対する基本的な考え方)。
4. コロナワクチン接種を接種年齢別に伺ったところ、接種年齢が高いほど接種している施設が多く、接種年齢が低いほど接種していない施設が多い傾向でした。(3-2-2. コロナワクチン接種実施状況)。
5. コロナワクチンに対する基本的な考え方と接種実施状況を接種年齢別にみると、いずれの年齢群も接種実施と接種の推奨は一致していますが、11 歳以下、特に 6 か月～4 歳の群で接種未実施の中に接種を推奨しない数が多い傾向でした(3-2-3.～3-2-6. 年齢別コロナワクチンに対する基本的な考え方と接種実施状況)。
6. コロナワクチンを接種していない理由を伺いましたが、24 件のご回答を頂きました。ワクチンの有効性、安全性、必要性の懸念が 10 件、事務手続きやワクチン管理に労力が 7 件、時間や場所、人手の問題が 5 件などでした。
7. 小児のコロナワクチン接種に対するご意見は 57 件頂きました。小児は軽症で必要性に対する懸念が 23 件、副反応の心配が 15 件、小児への接種が進まないのは啓蒙が不足しているというご意見が 11 件、手間や時間的、人的な問題のご指摘が 8 件などでした。
8. ご自身のコロナワクチン接種についてですが、3 回以上の接種は 96%で、未接種は 2%でした(8. ご自身のコロナワクチン)。

HPV ワクチン

9. HPV ワクチンに対する基本的な考え方を伺ったところ、すべての対象者に積極的に推

奨が90%で、接種すべきではないという回答はありませんでした(4-1. HPV ワクチンに対する基本的な考え方)。また男児にも接種すべきと回答されたのは17名、19%でした。

10. HPV ワクチンを接種している施設は 91%で、接種していない施設は 6%でした(4-2. HPV ワクチンの接種)。
11. HPV ワクチンを接種している、あるいは予定している年齢層は、小学校 6 年から高校 1 年相当までの定期接種が 98%、高校 2 年相当から 25 歳までのキャッチアップ接種が 92%でした。シルガード 9®(9 価ワクチン)はアンケートの時点で定期接種になっていませんでしたが、希望者に任意接種するとご回答されたのは 48%でした。
12. HPV ワクチンを接種している、あるいは予定している対象者をお伺いしたところ、希望するすべての患者が 92%、いわゆるかかりつけの患者のみが 9%でした。また希望した男児に接種しているのは 19%でした。
13. HPV ワクチン未実施は 5 施設でしたが、その理由は対象者が少ないあるいはいないが多く、副反応の心配が 1 件でした。
14. HPV ワクチンの再勧奨についてのご意見は 50 件頂きました。40 件は勧奨を歓迎するもので遅過ぎるとのご指摘もありました。もっと啓蒙すべきとのご意見が 10 件、男児にも接種すべきとのご意見が 3 件でした。一方、副反応の心配が 3 件、効果に疑問が 1 件ありました。
15. コロナウイルス感染症に対するご意見を 27 件承りました。

アンケートの時点でコロナウイルス感染症は「感染症法」2 類相当で、まだ 5 類への移行は決まっていませんでした。5 類となった以降の懸念がもっとも多いご意見でした。どういう対応になるのか、その指針は出るのか、医療費の自己負担や加算の終了などの問題、小児科の診療体制などです。今後はただのかぜとなっていくことが予想されますが、マスクの必要性も含めこどもたちの生活環境が取り戻せるか心配するご意見もありました。またいまだに発熱患者を診療しない医療機関があるのご指摘もありました。

総括

今回のアンケート調査の回収率は 40.2%と低調でした。

コロナワクチン接種ですが、実施施設は前回のアンケートでは 70%でしたが今回は 82%でした。ただ接種年齢が低いほど推奨せず、接種をしていない割合が増える傾向でした。小児は軽症で必要性に対する懸念や副反応の心配が根底にあるようです。

ご自身のコロナワクチンについては、3 回以上の接種は 96%でした。

今後のコロナウイルスの流行や変異にも依りますが、予防接種の意義やその効果、中長期を含めた副反応などに注目していかなければならないでしょう。

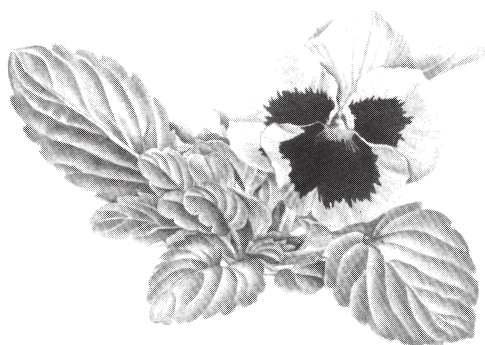
HPV ワクチンに関しては概ね肯定的なご意見で、積極的に推奨が 90%、実施施設は 91%でした。男児への接種については推奨、実施とも 19%でした。

一方、副作用に対する心配が 3 件、さらに効果に対する疑問が 1 件ありました。

横浜市小児科医会への要望は 14 件ありました。

このコロナ禍で子どもたちの生活に大きな影響がありましたが、これに対して何らかの支援を行えないかのご意見がありました。また医会としては会員、特に若手を増やし、医師会や地方自治体に発言して、他医会とも交流すべきとのご指摘がありました。

文責：田口 暢彦



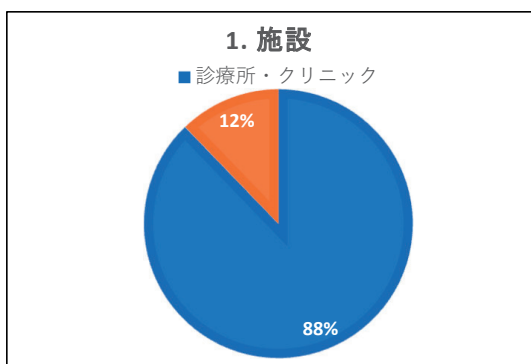
コロナワクチン・HPVワクチンについてのアンケート集計結果

※アンケート回収率

送付数	回答数	回収率
224	90	40.2%

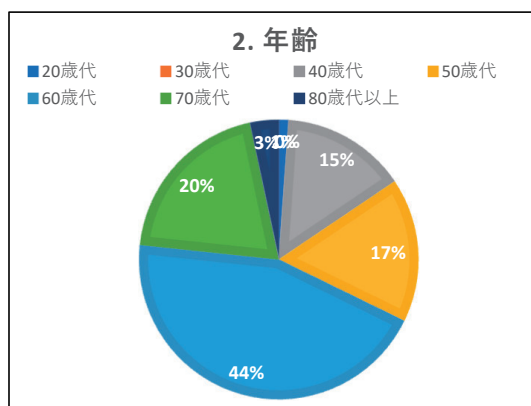
1.施設

診療所・クリニック	79
病院	11
未回答	0



2.年齢

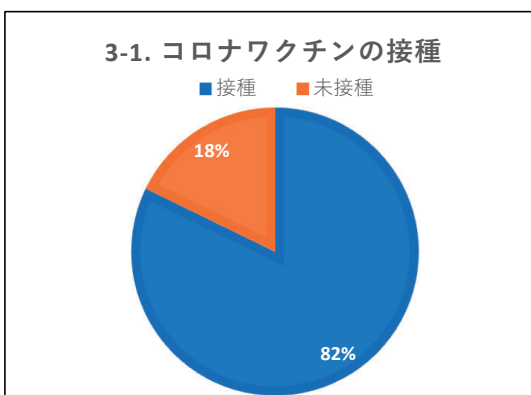
20歳代	1
30歳代	0
40歳代	13
50歳代	15
60歳代	40
70歳代	18
80歳代以上	3
未回答	0



3-1 コロナワクチンを接種していますか？

接種	74
未接種	16
接種を予定している	0

82.2%

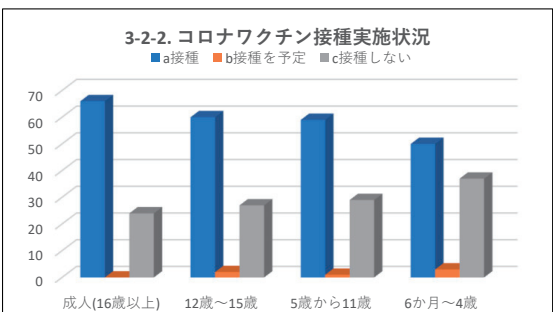
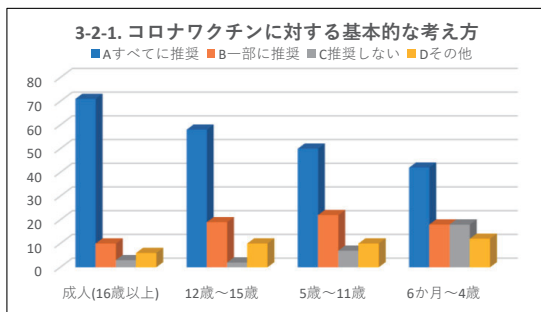


3-2-1. コロナワクチンの基本的な考え方

	成人(16歳以上)	12歳～15歳	5歳～11歳	6か月～4歳
A 対象年齢すべてに推奨	71	58	50	42
B 基礎疾患がある、高齢者と同居しているなど一部の小児に推奨	10	19	22	18
C 推奨しない	3	2	7	18
D その他	6	10	10	12

3-2-2. 接種実施状況

	成人(16歳以上)	12歳～15歳	5歳から11歳	6か月～4歳
a 接種している	66	60	59	50
b 今後接種を予定している	0	2	1	3
c 接種していない	24	27	29	37



【年齢別】

3-2-3. 成人(16歳以上)

	Aすべてに推奨	B一部に推奨	C推奨しない	Dその他	合計
a接種	60	4	1	1	66
b接種を予定	0	0	0	0	0
c接種しない	11	6	2	5	24
合計	71	10	3	6	90

3-2-4. 12歳から15歳

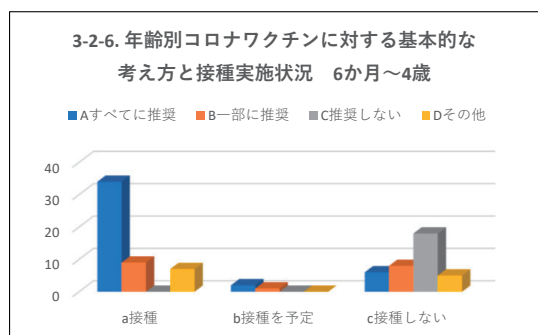
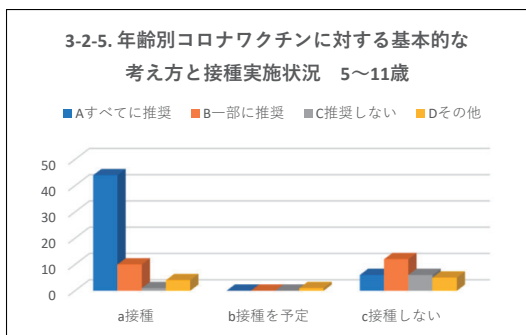
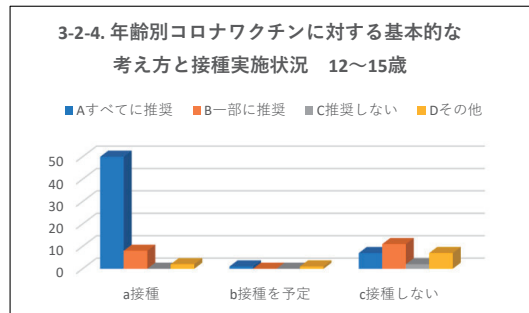
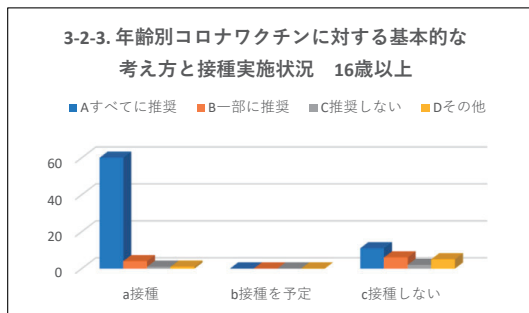
	Aすべてに推奨	B一部に推奨	C推奨しない	Dその他	合計
a接種	50	8	0	2	60
b接種を予定	1	0	0	1	2
c接種しない	7	11	2	7	27
合計	58	19	2	10	89

3-2-5. 5歳から11歳

	Aすべてに推奨	B一部に推奨	C推奨しない	Dその他	合計
a接種	44	10	1	4	59
b接種を予定	0	0	0	1	1
c接種しない	6	12	6	5	29
合計	50	22	7	10	89

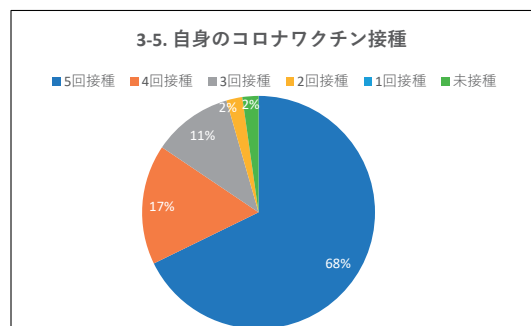
3-2-6. 6か月から4歳

	Aすべてに推奨	B一部に推奨	C推奨しない	Dその他	合計
a接種	34	9	0	7	50
b接種を予定	2	1	0	0	3
c接種しない	6	8	18	5	37
合計	42	18	18	12	90



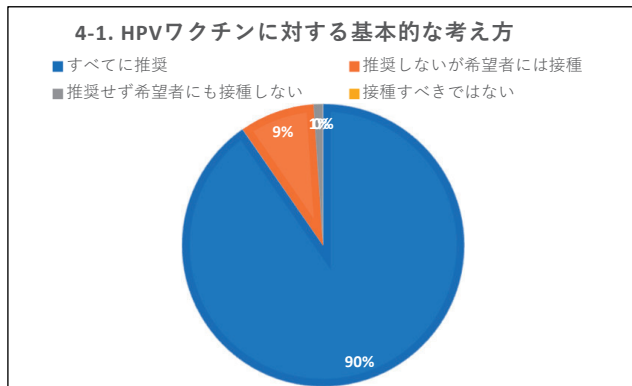
3-5. 自身のコロナワクチン接種回数

5回接種	61	67.8%
4回接種	15	16.7%
3回接種	10	11.1%
2回接種	2	2.2%
1回接種	0	0.0%
未接種	2	2.2%



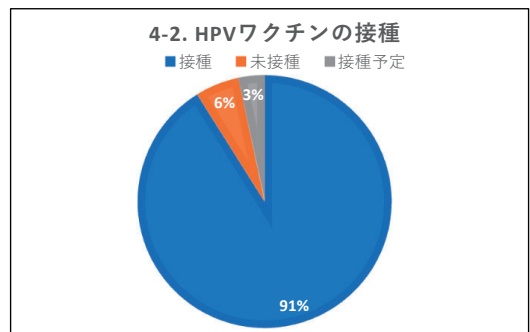
4-1. HPVワクチンの接種に対する基本的な考え

すべての対象者に積極的に推奨	84
積極的には推奨していないが、希望者には接種すべき	8
積極的には推奨せず、希望者にも接種は推奨しない	1
すべての対象者に接種すべきではない	0
男児にも接種すべきである	17
その他	0



4-2. HPVワクチンを接種していますか？

接種	82	91.1%
未接種	5	5.6%
接種予定	3	3.3%



4-3. HPVワクチンを接種している、あるいは予定している年齢層

小学校6年から高校1年相当までの定期接種	83	98%
高校2年相当から25歳までのキャッチアップ接種	78	92%
シルガード9®(9価ワクチン)を希望者に任意接種	41	48%

4-4 HPVワクチンを接種している、あるいは予定している対象者

希望するすべての患者	78	92%
いわゆるかかりつけの患者のみ	8	9%
希望した男児	16	19%
その他	0	

コロナワクチン・HPV ワクチンについてのアンケート調査

横浜市小児科医会事務局 行き
(FAX : 045-201-8768)

該当する項目に☑をお願いします。

1. 施設：☐診療所・クリニック ☐病院 ☐未診療
2. 年齢：☐20 歳代 ☐30 歳代 ☐40 歳代 ☐50 歳代 ☐60 歳代 ☐70 歳代 ☐80 歳代以上
3. コロナワクチンについて
 - 3-1 コロナワクチン接種を実施していますか？
☐はい ☐いいえ ☐実施予定
 - 3-2 コロナワクチンに対する各年齢層別の基本的な考え方と接種実施状況をお答え下さい。
 - 3-2-1 基本的な考え方
 - A 対象年齢すべてに推奨している
 - B 基礎疾患がある、高齢者と同居しているなど一部の小児に推奨している
 - C 推奨しない
 - D その他
 - 3-2-2 接種実施状況
 - a 接種している
 - b 今後接種を予定している
 - c 接種していない

回答欄：対象年齢別にあてはまる記号に○を付けて下さい。

	3-2-1 基本的な考え方	3-2-2 実施状況
成人(16 歳以上)	A B C D	a b c
12 歳から 15 歳	A B C D	a b c
5 歳から 11 歳	A B C D	a b c
6 か月から 4 歳	A B C D	a b c

D その他を選ばれた方は、具体的にお答え下さい。

3-3 コロナワクチン接種を実施していない理由をお答え下さい。

3-4 小児のコロナワクチンは接種が進んでいませんが、ご意見をお聞かせ下さい。

3-5 ご自身はコロナワクチンを接種されましたか？

- ☐5 回接種
- ☐4 回接種
- ☐3 回接種
- ☐2 回接種
- ☐1 回接種
- ☐未接種

4. HPV ワクチン(子宮頸がんワクチン)について

4-1 HPV ワクチンの接種に対する基本的な考えをお答え下さい。 ※複数選択可

- ☐すべての対象者に積極的に推奨している
- ☐積極的には推奨していないが、希望者には接種すべきである
- ☐積極的には推奨せず、希望者にも接種は推奨しない
- ☐すべての対象者に接種すべきではない
- ☐男児にも接種すべきである
- ☐その他 _____

4-2 HPV ワクチン接種を実施していますか？

- ☐はい
- ☐いいえ
- ☐実施予定

「はい」「実施予定」と回答された方は 4-3 へお進み下さい。

「いいえ」と回答された方は 4-5 へお進み下さい。

4-3 HPV ワクチンを接種している、あるいは予定している年齢層をお答え下さい。

※複数選択可

- ☐ 小学校 6 年から高校 1 年相当までの定期接種
- ☐ 高校 2 年相当から 25 歳までのキャッチアップ接種
- ☐ シルガード 9[®](9 価ワクチン)を希望者に任意接種

4-4 HPV ワクチンを接種している、あるいは予定している対象者をお答え下さい。

※複数選択可

- ☐ 希望するすべての患者
- ☐ いわゆるかかりつけの患者のみ
- ☐ 希望した男児
- ☐ その他 _____

4-5 【4-2 で「いいえ」と回答された方】 HPV ワクチン接種を実施していない理由をお答え下さい。

4-6 HPV ワクチンが再び勧奨されましたが、ご意見をお聞かせ下さい。

5. コロナ感染症についてご意見がありましたらご記入ください。

6. 横浜小児科医会に対してご要望などありましたらご記入下さい。

ご協力ありがとうございました。

会員動向（令和5年4月～令和5年9月）

編集後記

入会 3名

松崎 陽平

〒248-0031

神奈川区三ツ沢西町1-1

横浜市民病院

TEL 045-316-4580

コメント 2023年4月より市民

病院の小児科長をさ

せていただくことになりました。地域の先生方と蜜に連携した小児医療を目指しておりますので、いつでもご紹介ください。よろしくお願い致します。



岩田 眞美

〒231-0005

中区本町6-50-10

横浜市こども青少年局

TEL 045-671-4287

コメント

前任の辻本先生の後を引き継いで入会した、横浜市こども青少年局こども保健医務監の岩田です。行政は縦割りで、どこに問い合わせればいいかわかりにくいと感じの先生方、何かありましたら、窓口になりますので、いつでもご相談ください。横浜のこども達のために、できることを頑張りたいと思っておりますので、どうぞよろしくお願い致します。



お忙しい中、小児科医会ニュースにご寄稿頂きました先生方、ありがとうございました。

今年は一年を通し、様々な感染症が流行しました。最近では、インフルエンザ、溶連菌、アデノウイルス、感染性胃腸炎が流行しています。色々な感染症が同時に流行しているため、体調が完全でないところにまた次の感染症をもらってしまうお子さんもいます。今年もあと2週間です。クリスマスやお正月、楽しい冬の行事が続きます。コロナ感染症が5類に移行してはじめての冬休み。久しぶりに家族や親戚、友人と集まってお祝いできるでしょうか。子ども達が皆元気に過ごし、沢山の思い出を作ることができることを願っています。

（広報担当理事 中島 章子）

退会 10名

区 名	氏 名	備 考
鎌倉市	岡島 昌子	
緑 区	一色 保夫	
戸塚区	鈴木 妙子	
泉 区	奥原 清任	
神奈川区	村瀬 雄二	
保土ヶ谷区	冠木 宏之	
西 区	田口 暢彦	
港南区	山田 博子	
栄 区	山崎 登志雄	
都筑区	大久保 直樹	

異動：0名

会員数：217名（令和5年9月30日現在）

2023年11月1日発行
 横浜市小児科医会ニュース No. 67
 題字 五十嵐鐵馬
 発行人 横浜市小児科医会
 代表 岩崎 志穂
 編集：横浜市小児科医会広報部
 事務局：〒231-0062
 横浜市中区桜木町1-1
 横浜市医師会 地域医療課
 Tel 201-7363